

## ツムラ工場、予科練記念館見学の記

須山茂樹（東京）

11月16日、経済倶楽部の事業所見学会で茨城県阿見町の予科練平和記念館と漢方薬のメーカー、ツムラの茨城工場を見学した。

ある有名な東大医学部の名医が定年退職するときには誤診率が十数パーセントであったと告白して、専門家はその数字のあまりの低さに驚嘆し、一般の人はあまりの高さにびっくりしたと伝えられたことがある。実のところ、身内の者が診断を間違われた経験もあり、私は医者が苦手で、西洋医学の薬は基本的に「毒」だと思っている。

病気を治すのは本人の体の治療力であり制御力で、医者や薬品はその手助けをするにすぎないのに、多くの人が医者や薬が治してくれると誤解している。近年

の医療技術の進歩や新薬の開発は素晴らしいが、一方で対症療法的な薬は人の回復力や免疫力を弱めているのではないかと。

「証」に合った処方をする漢方の考え方に心ひかれるし、何千年の人間の知恵と経験が凝集した漢方薬の一端にでも触れたいとツムラの見学に期待した。有効成分を抽出する製造装置と工程はほんのちよつと覗けただけだったが、製造技術としては簡単なものであるとの説明であった。

最初に見せていただいた薬材倉庫は大きな袋が整然と並べられ、よくこれだけの原料を集められるものだと感心した。80%は中国から、5%はベトナムからの輸入とのこと。

そして漢方記念館は素敵な宝庫だった。東洋医学の理念と歴史、歴代の名医、わが国の学者たちのパネル実際に使われた薬用具の数々、120種に及ぶ生薬原

料の見本等々、本当に時間がたりない。説明してくださった工場長はじめ担当の方々は薬の会社らしく穏やかで丁寧でそれでいてユーモラスで、見学を一層有意義にしてくださった。

余談だが、有効成分を抽出した生薬の残滓は年間2万トンにも及び、培養土や肥料などになっている由、もちろん有効成分がまだ若干残っているそう、一クッキーにならないかと冗談半分に質問したら、担当の方は律儀に首をひねっておられた。

午前中に見学した予科練平和記念館、年配の方には「予科練」で説明を要しないが、ここに戦前から戦中にかけて海軍航空隊の基地があり、飛行士などの卵の10代なかばの「予科練習生」を訓練した。延べ24万人が入隊、2・4万人が出征し、その8割が戦死した。特攻隊として飛び立っていった若者も多かったとのことである。

長野県上田市郊外の「無言館」（戦没画学生の遺作展

示館）もそうであるが、私はこういうところに弱い。国のためと信じ、20歳になるやならずで逝った若人の心情を思うと涙が止まらないし、愚かな戦争に突入した国の指導者や無益な作戦に純真な命を散らせた将軍たちに腹が立ってたまらないからである。

鍛錬で綱引きと応援している少年たちの大きな写真が入り口近くに掲げられている。事情はわからないがガリガリに痩せているのが痛ましい。親などの家族に宛てた手紙を読むと、彼らの使命感の強固さ、日本人としての誇り、両親、特に母親に対する思いと感謝、本心に涙が溢れてくる。

東京の原宿や渋谷などでウロチョロしている若者にぜひここを見せてやりたいと心底思う。もうひとつ年寄りの繰言を述べて締めくくりとしたい。同行の皆さんも異口同音に言っておられたが、予科練習生の知性と志操、文章の上手さと達筆には感銘を受けた。それにしては近頃の若者は：である。